

探索した結果、霧島山に源流を有する新川温泉群の中、金山川に臨む妙見温泉（姶良郡牧園町）を候補地とし、該地の河川を探索した結果、終に本年4月13日、縣觀光課、赤星昌氏の盡力に依つて該地に本藻の自生する事を確かめ、標本に作製する事を得た。

因みに、この第二の新産地は分布區域が極めて局限されてをり右温泉を中心とする上下約700米の區間に限られてゐる。之はこの上流部は河床に盛んに温泉湧出する爲め、水温高きに過ぎ、下流は支流中津川（一名、天降川）の合流に依つて水温低きに過ぎて何れも生育に不適である爲と考へられる。

終りに臨み、著者の研究調査に多大の盡力を與えられた縣觀光課赤星昌氏並びに鹿児島大學水産専門學校教員堀口吉重氏に感謝の意を表する。（二四、九、三〇記）

（附記）本縣下にチスジノリが以上の2ヶ所の他に市内一色、谷山慈願寺及び揖宿郡霧姪（えひ）村水成（みなり）川、加治佐川（かぢさ）にも産する事を仄聞したので、最近實地調査を行つて見た結果、之等の産地のものは何れもチスジノリではなくオホイシサウ（*Compsopogon Oishii* Okam.）であつた。外觀が近似するので誤認したものと思はれる。

○英國で出版されたボタンとサクラの本（原 寛）H. HARA:

Stern's 'A study of the genus *Paeonia*' and Ingram's 'Ornamental cherries'.

近年ロンドンで出版されたボタンとサクラに関する書を王立園藝協會の W. T. Stearn 氏の御好意によつて入手することができたのでここに紹介する。

F. C. Stern 氏の A study of the genus *Paeonia* 155 p. (1946) は folio 大のもので、紙といい印刷といい近年の豪華本である。15 枚の美しい水彩畫の圖版と 30 餘の線畫が入つていて、分布圖、表、文献目録等は Stearn 氏が準備したそうである。先づ節、亞節、種への檢索表があり、形態や細胞遺傳的特徴の概説があり、次に各群の發見歴史分布等に就いて述べてある。ついで主體をなす各群に入り、各種毎に文献、記載、説明がついていて、總計 33 種 14 變種が認められている。日本に關係あるものとしてはボタン *Paeonia suffruticosa* Andrews (p. 40), ベニバナヤマシャクヤク *P. obovata* Maxim. (p. 74), ヤマシャクヤク *P. japonica* Miyabe et Takeda (p. 78), シャクヤク *P. lactiflora* Pallas (p. 91), その栽培品 var. *trichocarpa* F. C. Stern (1943) (p. 93) が載つてゐるが、日本のものについては餘り新知見はみられない。反つてヤマシャクヤクとベニバナヤマシャクヤクを花瓣の開き具合や葉下面の毛を區別點として分けてゐる等はもの足りない氣がする。尤も説明中ではその區別が難しい事を認め、前者が 2 倍體、後者が 4 倍體であるので別種とする旨述べてゐるが、この點は日本産について再檢を要する。又ヤマシャクヤクの項で、箱根近くの山で採られ心皮に密毛があつて Stapf 博士により *P. chaetocarpa* と名付けられた腊葉があると書いてゐるが、これは栽培の

シヤクヤクではないかと疑われる。

Ornamental cherries (1948) の著者 Ingram 氏は熱心な園藝家で、25 年間にわたつて櫻を採集し日本をも訪問した事がある。この書は 3 部に大別され、第 1 部 (70 p.) は歴史、栽培、文献等について概括的に述べてあり、第 2 部 (120 p.) は自生種に関する部分で、亞屬、節に分け更に各種毎に色々な説明や記載がついていて、第 3 部 (50 p.) では英國で栽培されている日本のサトザクラの園藝品種について検索表をかかげ、各品種についての説明がつけてある。又所謂サクラ類の外にミヤマザクラ、ウワミズザクラ、ニワウメ、ユスラウメ等も廣く含まれている。日本の櫻に関する記事は各所に見られ、著者自身の描いたオオヤマザクラの着色圖版や日本の櫻の寫眞も可成りはいっている。説明は讀物としても面白く書かれていて、英國に輸入されているものに就ては生品でよく觀察してあるが、自生種の分類、異名、分布等については著者が分類専門家でない點もあつて同意しかねる點もある。

次に日本のサクラに關係のある興味深い記事を拾つてみる。第 2 部で日本自生のヤマザクラ類はオオヤマザクラ *Prunus Sargentii* Rehder, ヤマザクラ *P. serrulata* Lindley var. 及びオオシマザクラ *P. speciosa* Ingram の 3 種に分けられている。所が第 3 部サトザクラの項では、その中にヤマザクラ或はオオシマザクラ起源のもの、祖先不明のもの等色々ある事を認めていながら、これ等凡でをソメイヨシノを除き便宜上一つの學名 *P. serrulata* の下に命名して扱っている點が注意を惹く。又 Carrière の *Cerasus Lannesiana* は花が繖狀につく點等から、Wilson の様にサトザクラにあてるのは誤であるとし、多分オオヤマザクラであろう事を強調している。

Prunus serrulata Lindley は 1822 年廣東から英國へ輸入された白花八重咲で、中支那山地に自生する *P. serrulata* var. *hupehensis* Ingram の園藝品種であり、日本には栽培されていないと思うと述べている。日本から歐洲へ送られた最初の櫻は八重咲淡紅花のもので 1832 年の秋フランスに到着したという。日本のヤマザクラは *P. serrulata* var. *spontanea* Wilson とされていて、日本人にはおこられるだろうかと前置きをして、これは日本本來の自生ではなく、6—7 世紀に佛教と共に支那から渡つたものであるとの獨自の見解を述べている。ケヤマザクラ *P. serrulata* var. *pubescens* Wilson 中にはカシミザクラやテウセンヤマザクラも入れられ、又雜種と思われるもの迄もヤマザクラ系で葉に毛のあるものは凡てここに含まれている。一方タカネザクラとチシマザクラは各別種として扱われている。

この兩書は共に著者が多年にわたつて苦心して世界各地から集めた生品を基礎資料として心ゆく迄眺め樂みながら餘裕のある著述をしている點が特に現在の日本ではうらやましく感ぜられる。